

「子どものレジリエンスを高める授業づくり」

～ 教師と子ども、子どもと子どもを『つなぐ』活動を通して～

1 研究概要

(1) 本研究の課題設定の理由

「令和3年度 全国学力・学習状況調査（児童質問紙）」には、「自分には、よいところがあると思いますか。」という設問があった。本校の結果は、埼玉県と全国のどちらにも及んでいなかった。

質問番号	自分には、よいところがあると思いますか			
(6)				
選択肢	1	2	3	4
貴校	36.4	33.6	15.7	14.3
埼玉県（公立）	40.8	37.2	12.7	9.2
全国（公立）	36.2	40.7	15.5	7.5

本校はこの原因をレジリエンスと関わりがあるのではないかと考えた。レジリエンスとは「落ち込みにくい力」、「落ち込んでも立ち直り、適応していく力」である。そこで、わからない児童がわからないと言い、間違いや失敗をよい学びの機会とし、全ての子どもが安心して学べる雰囲気のクラスを実現するための研究を始めた。

(2) 1年目の研究（令和4年度）

まず、子どもたちのレジリエンスを高めている教師の言葉がけやふるまいを見つけることにした。そのために、教師が無意識に行っている授業中での言葉がけやふるまいを生徒指導の三要素である「自己決定・共感的理解・自己存在感」の観点から分析した。例えば、ある教師は、指名したときに、質問に答えられなくなった子どもに対して、明るい笑顔で「次は活躍してもらおうよ」と、言葉がけをした。このような励ましの含まれる言葉がけは子どもの自己存在感を高めることにつながるのではないかと、分析することができた。このような、レジリエンスを高めるために効果的な言葉がけやふるまいを言語化して全体で共有する研究をした。

(3) 2年目の研究（令和5年度）

2年目の本年度は、「子どもと子ども」をつなげて、共感的な人間関係を広げることに焦点を当て研究をした。例えば、ある教師は、普通だったら選ばない選択をして、それを発表した子どもに対して、「その選択は貴重だよ。堂々と発表できてすごい。拍手だね」と、言葉がけをした。このような、多種多様な考えを認められる学級を作ろうとする教師の言葉がけやふるまいを見つけて、言語化して共有した。

また、1年目の研究で、「子どもたちのレジリエンスの変容が見えにくい」という課題が挙がっていたため、2年目は評価方法を工夫した。具体的には、「食べ物で苦手なものが出たとき、あなたはどのようにしていますか」という問を設け、子どもたちの自由記述の内容をルーブリックを用いて評価したり、抽出児童の追跡調査したりした。

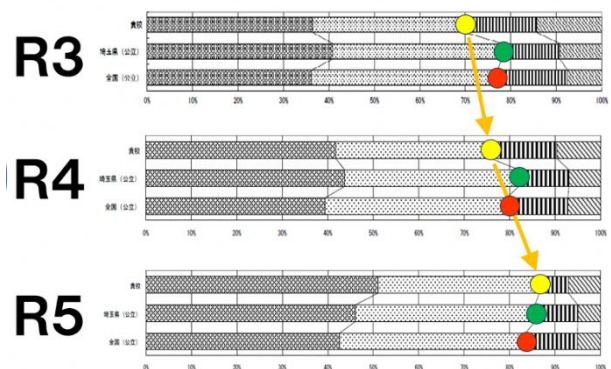
2 研究の成果と課題・指導の工夫

1年目の研究の成果として、「学校全体に温かな雰囲気や育めた」、「教師の授業を見取る力が高まった」、「教師が意図的な問いかけを心掛けるようになった」などが挙げられる。

2年目の研究では、指導の工夫として、全学年で「友だちと友だちがつながったピカリと光る瞬間」を発表する時間を設けて、それを掲示して蓄積していった。また、先述のアンケートの1回目の結果から、学年が上がるにつれて、困難に対抗する具体的な行動や考えを複数個持つ子どもが増えることが分かった。2年目の研究の成果と課題については、2月の2回目のアンケートの結果を踏まえて、これから明らかにしていく。

3 最後に

先述の「自分には、よいところがあると思いますか。」に対する、本校の値は伸びてきている。令和5年度になって、本校の結果は、県も、全国も、上回った。校内研究だけではなく、本校の教職員の様々な取り組みや、家庭・地域からの協力によって、この変容が現れたのだと考えられる。



(※各年度、上段が本校、中段が埼玉県、下段が全国)

主体的・対話的で深い学びの実現を図る算数科指導法の工夫・改善

～一人一人に目を向け、学びのスイッチを育む教育活動の充実・推進のために～

1 研究概要

(1) 授業改善「学びアクティブ PLUS」の着実な進捗を図るための教員の授業力向上

- ① 主体的・対話的で深い学びの充実を図るための授業力の向上（算数科を中心に全教科での取組）
 - ア 授業の流れを「めあて 見通し→学び合い 習得・習熟→まとめ ふりかえり」に設定した。
 - イ 問題から情報を取り出す。
わ・き・た・さんの活用。

わ かわっていること き かけられていること た たい

- ウ 問題点の内容や問題を解釈する
問題内容の明確化や課題づくり（問題点をつかむ）
- エ 学び合いの充実
3人で学び合いを行う。自力解決の時間を確保し、他者とのやり取りを通じて、思いや情報、考えなどを共有し、相互理解や認識を深めたり、合意形成をしたり、ともに実践したりする。
- オ まとめ
学んだことの整理確認。
- カ ふりかえり
学びの自覚 学びの定着
学びの実感
写真 グループによる学び合い
静寂の中で自己と対話する時間



- ② 荒幡小授業スタンダード作成
 - ・指導の version up をしていく。
授業をするすべての教師が同じ意識のもとで、同じ授業の流れを行うことで、児童が安心して授業にのぞむことができる。

(2) 自己肯定感を育み、能動的な学習者を育てるための「能動的に聴く・聴き合う・つなぎ合う授業」の推進

- ① 聴く構えづくり【学びのスイッチ】
 - ・足の裏を床につけて、話をする人を向いて話が聴ける構えをつくる。
 - ・スイッチを入れるための読み取り など
- ② 向かい合う体験づくり
【他者と関わる意欲とスキルの向上】
 - ・ペア学習（2人組 3人組）
 - ・コミュニケーションスキルの向上

- ③ 尊重される体験づくり
【居場所づくり・共感的人間関係の醸成】
 - ・互いの凸凹を埋め合い認め合う
 - ・授業外での児童との接し方

2 研究成果（児童の変容等）

(1) 主体的・対話的で深い学びの充実を図るための授業力の向上

- ・令和4・5年度の全国学力・学習状況調査の結果を受け、低い学習意欲、規範意識、コミュニケーション能力は児童の低い自己肯定感に起因するものであると考えるに至った。
- ・算数科の研究を通じて、問題を丁寧に読むことやグループでの話し合いを学習に取り入れること、また、習熟度別授業、少人数指導も実施しており、全体的に学力が向上してきている。

(2) 自己肯定感を育み、能動的な学習者を育てるための「能動的に聴く・聴き合う・つなぎ合う授業」の推進

- ・全国学力・学習状況調査の結果より1年で「教師が児童のよさを認める」項目は全国平均と同程度に、「児童自身が自分の自分自身の良さを認められる（自己肯定感）」は全国を上回る結果となった。

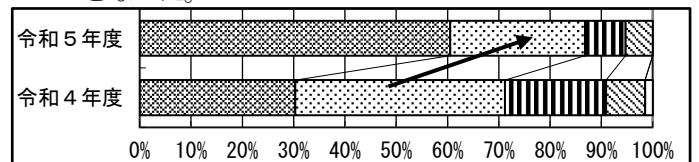


図2 自己肯定感を表すグラフ

- ・令和5年度の6年生では「自分にはよいところがある。」と回答した児童は県平均を下回っており、自己肯定感が低い数値となった。先生たちはよいところを認めてくれていたと回答した児童は80%程度なので、教師のファシリテートのもと、児童同士のつながりも強い（QUテストの意識調査より）ので、今後の自己肯定感の向上も期待できる。

3 今後の課題

「よさを認める教師行動」「児童の自己肯定感」は共に上昇傾向が見られたが、「学校に行くのは楽しいと思えますか」という項目については減少傾向が2年前から見られる。児童にとって行きたいと思える学校になるために共通理解や共通行動を継続的に行っていくことが課題となった。

自分の考えを豊かな言葉で表現できる児童の育成

～主体的・対話的で深い学びの視点による授業改善を通して～

1 研究概要

(1) ゴールを決めて授業を組み立てる

児童に獲得させたい中心的な概念を決める。どの単元、どの授業も「この学習を通して、何ができるようになればよいのか」という具体的な児童の姿をイメージして行う。そして、ゴールに到達するために、何を対話させるかを考えて授業を展開した。

- 4年生の実践：「新聞をつくろう」（国語）
 - ・新聞の特徴を生かして、事実を受け手に分かりやすく伝える。→児童が表現方法を考え、グループで決定し、表現する。これによって、新聞の構成や表現のよさに気づく。

(2) 表現力・語彙力向上のための手立て

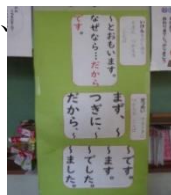
① インプットとアウトプット

- 「言葉の木」の掲示…インプットを重視する。児童が獲得した言葉を掲示し、増やしていった。
- 「あのね帳（日記帳）」…自分の思いを表現する。（1年）
- 言葉を楽しく習得…辞書やネット検索の活用、教科書巻末資料「言葉の宝箱」の活用で、教室に掲示し、他教科でも活用し、語彙力を向上を図った。
- ICTの活用



「言葉の木」の掲示物

クイズ作成ツールを活用し、児童の興味関心をひくと同時に、語彙力向上につなげる。話し合いや意見提出は、PCを活用、により話し合いが充実する。



「話のつながり」の掲示物

② 具体的な対話の指導

各学年の実態に応じて、次のことを中心に取り組んだ。

- 話のつながり
- 受けとり方の指導（認める声掛け）
- ブレインストーミング（否定しないこと）
- うまく伝えられない時に、みんなで補足することが当然という意識（雰囲気）づくり
- 「言葉」で安心できる学級づくり
- 本質にせまる質問の仕方

(3) 学び合いになるために

- なかよしタイム…対話を促す工夫（発表→質問→回答のやりとり）、机の配置を工夫、話型を掲示。



机の配置の工夫

- 児童の考えを可視化…黒板に短冊で掲示、書画カメラやPC等の活用
- 多様な学習形態…ペア学習やグループ学習を通してのスピーチで、段階的にレベルをあげる。アウトプットとして、多様な考えに触れ、自分との共通点や相違点から新たな発見を促す。

(4) 振り返りのさらなる充実

- いろいろな学習場面での振り返り
- 振り返りから次時の授業へ（指導改善に生かす）

2 研究成果（児童の変容等）

(1) 児童の表現力・語彙力向上

- 「言葉の木」「言葉の宝箱」等の話型の提示、例文の提示は、とても効果的だった。
- 対話の指導により、話し手、聞き手の意識や学級で安心して話せる、自分の思いを表現できる児童が増えた。
- 下図のアンケートの結果の通り、いくつかの項目で児童の意識の変容が見られた。「話をするのが得意になった。」「表現することが好きになった。」

⑥話をするのは得意ですか。

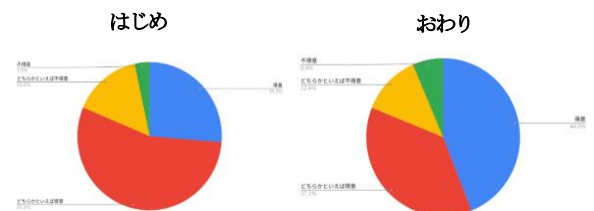


図1 児童への学習アンケート「話をするのは、得意ですか」の変容グラフ（全学年）
青…得意 赤…どちらかという得意
黄…どちらかという苦手 緑…苦手

(2) 教員の資質能力の向上

- 単元や授業等で、児童に何を身に付けさせたか（ゴールを決める）を明確にし、教員一人一人が教材研究に取り組んだ結果、教員のねらいが児童に伝わった。

3 今後の課題

- (1) 学習の達成感や自己の成長を感じられる学びの場を提供できるよう教師側の発話の研究を推進していきたい。
- (2) 今回の研究とともに、学習方略と非認知能力をさらに向上させ、学力向上につなげたい。

「能動的学習者としての子ども観」に立った授業の構築

～「総合的な学習の時間」に焦点を当てて～

1 研究概要

(1) 「能動的学習者としての子ども観」に立った授業の構築に向けて

～「はじめに子どもありき」を基本理念として～

本校では「はじめに子どもありき」の学校経営理念のもと、子どもが本来持つ学ぶ意欲、自ら追究し、自分で自分を創っていく力が発揮される授業の構築を目指し、教育活動に取り組んでいる。令和4年度までの4年間は各教科における研究、実践を行ってきたが、今年度は、これまでの研究をもとに、より子どもの能動性が発揮し得る「総合的な学習の時間」に焦点を当てた授業構成とその実践に取り組んできた。

[今年度ご指導いただいた先生方]

- ・ 平野朝久先生（東京学芸大学名誉教授）
- ・ 小幡肇先生（文教大学教授）
- ・ 岩間健一先生（昭和女子大学特命教授）

(2) 研究実践

総合的な学習の時間に「所中探究活動」を設定し、各学年20時間程の授業実践を行った。

①クラスで1つ探究活動のテーマを決める

⇒生徒の「やってみたい」「知りたい」を大切にし、自分たちでやってみることで気づくことや分かることに価値を見出していく。

⇒時間をかけ、本当にやりたいテーマを見つける。

②能動性が発揮し得る環境づくり

⇒校外における活動（施設見学や体験活動、街頭インタビュー等）や調理、実験など、様々な活動が行えるように学びの場を整える。

⇒教師が探究活動の流れや方向性を決めたり、活動に制限をかけたりにするのではなく、生徒自身がどうすれば良いか考え、試行錯誤し、課題や手段、目標を決めて活動できるようにする。

③終わりを決めない

⇒探究活動の成果発表を強制しないことで、生徒の活動の広がりを狭めることを防ぐ。



写真1 クラステーマを決める 写真2 映画の脚本づくり

2 研究成果

(1) 生徒の思い

以下は探究活動の詳細について、生徒に初めて伝える学校一斉のガイダンス終了後に行ったアンケート結果から生徒の期待度がわかる。

- ・自分たちで決めて自分たちで行動するから楽しみ
- ・これからの活動がワクワクです!!!
- ・いまずぐやりたいくらい楽しみで仕方ないです
- ・みんなで協力するのが楽しみです

資料1 学校一斉ガイダンス後の生徒の感想の一部

(2) わくわく度

わくわく度は、探究活動に生徒がどれだけ能動性を発出したかを見取るためのものとして、探究活動への期待を10段階で生徒が示したものである。以下は、第2学年の各探究活動の時間終了後に行う振り返りの中から、わくわく度の推移をグラフにしたものである。多くの生徒が探究活動に意欲的に取り組んでおり、またその推移も活動を追うにつれて少しずつ上向きになっている。

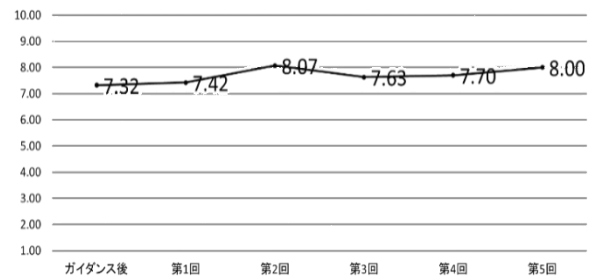


図1 第2学年の探究活動わくわく度の推移のグラフ

3 今後の課題

生徒の能動性がさらに発揮できるよう、手立てや学校全体としての運営方法、ルールづくり、評価方法など多岐にわたる。今年度の取組の状況も踏まえ、実践を深めていきたい。

生徒一人一人の考えを深めるための授業の創造

～ICTの効果的な活用を通して～

1 研究概要

(1) 主題設定の理由

ICT を効果的に活用することで、「個別最適な学び」と「主体的・対話的で深い学び」の2点を充実させ、生徒一人一人の思考力を向上させることを目指し、本主題を設定した。

(2) 研究仮説

- ① ICT を活用した授業を取り入れることで、個に応じた学習活動が充実し、生徒一人一人の学習意欲の向上につながるだろう。
- ② ICT を活用した授業を取り入れることで、協働的な学習を通じた生徒同士の学び合いが充実し、生徒一人一人が自ら考えを深められるだろう。

(3) 指導者による指導・助言

- ① 指導者：赤堀 侃司 東京工業大学名誉教授
- ② 7月、赤堀教授によるICTを効果的に活用するための講義・演習を実施した。
- ③ 9月、校内の全学級の授業を赤堀教授に公開し、さらなる助言を受けた。

(4) ICT 機器を用いた学習活動の推進

- ① 校内研修部が中心となり、schoolTakt や Google Jamboard 等の効果的な活用方法についての研修を実施した。
- ② 各教科等で、ICT を活用した授業を計画的に導入し、実践を積み重ねた。



写真1 タブレットを用いた話し合い活動の様子

(5) 学び合いを実現するための掲示物の工夫

- ① 各学級や特別教室で共通の掲示物を作成し、授業内での活用に取り組んだ。

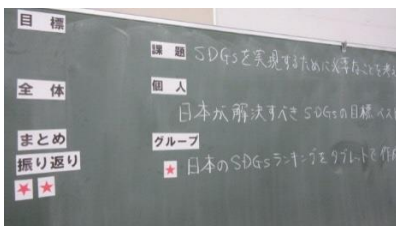


写真2 掲示物を活用した授業での板書の様子

2 研究成果（生徒の変容等）

(1) 生徒の学習意欲に係る意識の状況

生徒アンケートより、「もっと勉強ができるようになりたいか」という問いに対して、「そう思う」と回答した生徒の割合が、昨年度から今年度にかけて増加した。

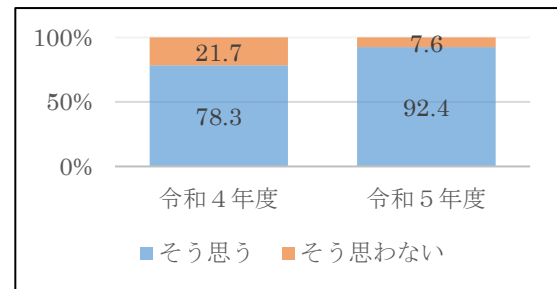


図1 生徒アンケートにおける学習意欲に関する比較グラフ

- ・ 「タブレットを活用した授業に今後も取り組みたい」という問いに対して、「そう思う」と回答した生徒が11.9%増加していることから、授業におけるICTの活用が生徒の学習意欲の向上につながっていると考えられる。

(2) 生徒の思考力に係る意識の状況

県学調の質問紙調査から、「先生の話や友達の発表をしっかり聞き、自分の考えを伝えることができたか」の項目で、「できている」と回答した中学3年生の割合が、昨年度から今年度にかけて増加した。

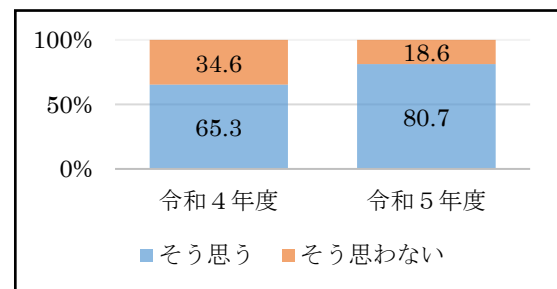


図2 県学調の質問紙調査における思考力に関する比較グラフ

- ・ 学び合いや調べ学習、発表等の場面でICTを活用する機会が充実したことで、生徒が自信をもって自分の考えを表現できるようになっていると考えられる。

3 今後の課題

ICTを活用することで、学んだ知識や技能を定着させていくことが課題である。そのために、ICTの活用に継続して取り組むとともに、効果的な活用方法をさらに発展させていくことが必要である。

「ICT を効果的に活用した授業づくり」

～児童の思考力・判断力・表現力を豊かにする効果的な授業の実践～

1 研究概要

(1) 研究仮説の設定

情報活用能力が「学習の基盤となる資質・能力」に位置付けられ、各教科における子供の学びを深めることが位置付けられた。この指標を参考に、本校では、3年計画となる、ICT を効果的に活用した研究を行うことを決めた。

令和4年度は、ICT が使えそうな場面では、積極的にICT を活用していき、活用する良さを探る研究を行った。授業の中で、ICT を活用する場面が増え、良さを付けられたという意見が出てきた一方、「どの場面で、どう活用するのが良いのかを上手く探ることができずに終わった。」という意見も挙がった。そのことから、「ICT を効果的に活用する良さだけではなく、効果的な活用方法を見つけることで、児童の学力向上が図れるのではないか。」と研究仮説を設定した。

(2) 研究の内容

令和5年度は、全教員が一人でICT を活用していた。学年で、ICT 機器を活用する中で、より効果的な場面を探し、児童の思考力・判断力・表現力を豊かにするという視点をもって、授業で実践していく。実践した授業が、どんな良さがあるのか、どんな難しさがあるのか、を含めて考察し、深めていった。

また、令和6年度は教科を絞り、絞った中から研究を進めていく予定である。令和6年度の研究をより良いものにする為に、令和5年度は、全教員一人一人がICT のスキル向上を果たすことが求められた。

(3) 研究目的

- ・教員一人一人がICT を活用した授業を実践できる。
- ・ICT を活用し、児童の思考力や判断力や表現力を豊かにする効果的な場面を探し、実践していく。
- ・学年で授業を公開し、更にICT の効果的な活用を目指す。
- ・思考力や判断力や表現力を豊かにするという視点から、効果的に活用できる場面の良さと難しさについて考察していく。

2 研究成果（児童の変容等）

(1) 児童同士の考えを共有できる授業の充実

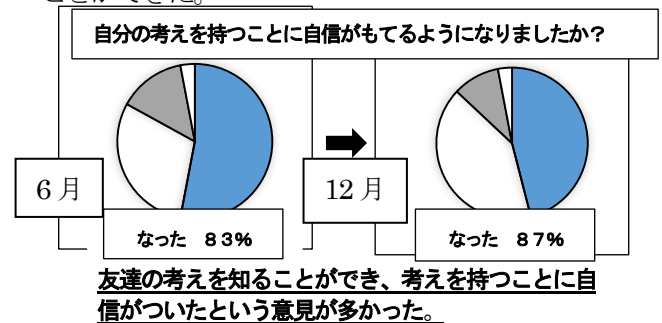
スクールタクトを活用して、児童同士の考えを共有することで、他者の考えを知ることができた。児童アンケートの結果から、児童から「他の人の意見を見られると、私と同じような気持ちの人がいたりして、嬉しい。」「他の人の考えを見て、考えつかない考えを知れるので考えが増える。」という回答が多く出た。また、スクールタクトは、教師と児童のやりとりだけでなく、児童同士も巻き込んで行え、本研究に有効だったと言える。

(2) 各教科によるタブレット学習の充実

各学年、どの教科でも思考力・判断力・表現力を豊かにできる場面を模索しながら、ICT を活用した授業を展開した。特に、道徳、国語でのICT の活用が多かった。児童アンケートから、「班で協働作業を行う際に、お互いの考えが分かり、まとめやすい。」「写真やグラフを活用しやすく、考えをまとめやすい。」との意見が出た。教科に応じた使い方によるが、タブレット学習の充実は考えを吟味する際に、効果的である。児童の考えの変容をみとる際にも、有効だと考える。

(3) 児童の意識調査から見る変容

6月と12月、全児童に対してゲーグルフォームを活用した、アンケート調査を実施し、考察した結果、児童の変容を意識した授業の展開をすることができた。



3 今後の課題

ICT 活用が子供にとって良い面があれば、デジタル画面の視聴時間が長くなることや小学校段階で鉛筆を手で持ち、ノートに書く機会が減る事で書く力が養われなくなることがデメリットとして挙げられた。また、やり直しや共有など、手軽さに注目されがちだが、やり直しが手軽ではないことも、小学校段階の子供にとっては大事ではないのかという意見も挙げられた。批判的視点も含めた研究も取り入れていき、より効果的に活用した授業づくりを学校全体で行っていきたい。

お互いのよさを認め合い、温かい人間関係を築く児童の育成

～自分も相手も大切にする話し合い活動を目指して～

1 研究概要

(1) 研究主題設定の理由

① 本校の児童の実態から

本校の児童は、明るく気持ちのよい挨拶のできる児童が多く、物事に取り組む姿勢も素直で、責任をもって行える。学習にも前向きに取り組むことができ、友だちと協力して活動に取り組んだり、自分の役割に責任をもって行動したりすることができている児童が多い。

しかし、自分の思いや考えを上手に相手に伝えることや相手の話を最後まで聞くことを苦手とする児童もおり、コミュニケーションに自信がなく、人間関係作りに難しさを感じている児童も少なくない。

② 課題解決にむけて

学校は、様々な考えをもつ子供たちと一緒に学習し、生活をする場である。学習を進める際に重要とされる「学び合い」は、自分の考えと違う意見を受け止めることや、違う考えと自分の考えとを比較し、折り合いをつけてよりよいものとしていくことであると考え。これらを実現するための話し合い活動の充実が、学び合いの活性化だけでなく、学級経営の基盤にもなると考え、本研究主題を設定とし、目指す児童像を「お互いの思いを伝え、認め合える子」とした。



写真 学級会の様子

(2) 仮説と手立て

目指す児童像の実現に向けて立てた仮説は「話し合い活動の流れを統一し、約束を理解できれば、子供たちは安心して自分の意見を言ったり相手の意見を聴いたりして、進んで伝え合うことができるだろう。」である。そのための手立てとして、

- ① 話し合い活動の流れの統一
- ② めあてや約束の提示
- ③ 必要感のある議題設定
- ④ 自分の思いを書く、振り返る時間の確保

⑤ 学級会グッズや学級会ノートの工夫

⑥ 話し合い活動の進行(シナリオ)や発表の仕方(話型)の作成

⑦ 話し合い活動に対する教師の共通理解

という、7点を掲げた。①～④、⑦については授業研究部、⑤と⑥は環境整備部という専門研究部が担当し、児童の変容については実態調査部がアンケート調査を実施、評価・考察し、フィードバックするという研究体制を整えた。

2 研究成果(児童の変容等)

(1) アンケート調査より

アンケートを定期的実施しているが、昨年度(令和4年12月)と今年度(令和6年1月)実施の結果を比較した。その中で、「みんなと一緒に問題を話し合っている」「助け合ったり、励まし合っている」の項目に「できる」「よくできている」と回答した児童が増加したことがわかる。

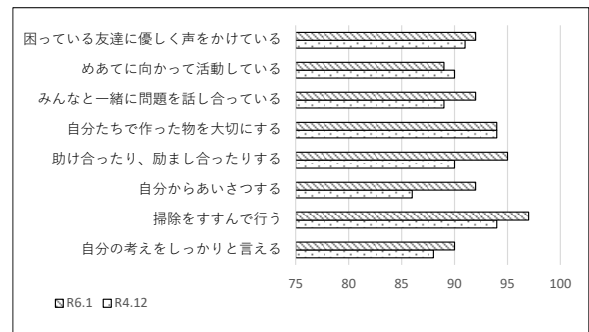


図 昨年度と今年度のアンケート調査の項目の比較

(2) 実際の学級会より

学級会では、学級会グッズやノートを統一したことで、誰でも安心して発言できるようになった。そして、誰でも司会を務めることができるようになった。また、友達の発言を静かに聞いたり、相槌や拍手をしたりして認め合える雰囲気がどの学級でも見られるようになった。

3 今後の課題

温かい人間関係は学級経営の基盤となり、学力向上にも寄与すると考えられる。今後は、学級活動で培った話し合い、認め合いの力を他教科につなげていくことでさらにその良さを認識し、持続可能な取組としていきたい。

主体的に課題を発見し、友達と協働して解決する児童の育成

～さあやるぞと、Chromebook で深い学びの授業改善をめざして～

1 研究概要

(1) 新たな学習ツールとして Chromebook を捉え、それを活用し深い学びにつなげる授業改善を目指した。

① 3つの目指す児童像を設定した上で、発達段階を踏まえたイメージ図を作成し、教員間での意識の共有を図り、6年間を見通した指導内容を明確にした。

ア 進んで学習課題に取り組み、過程や成果を表現できる子

イ 自ら思考し、学び合い高め合える子

ウ 学習内容に適した学び方を選択できる子

目指す児童像・イメージ図

項目/学年	1	2	3	4	5	6
①進んで学習課題に取り組み、	◎	◎				
②過程や成果を表現出来る		◎	◎	○		
③自ら思考し、			◎	◎	◎	
④学び合い高め合える				○	○	◎
⑤学習内容に適した学び方を選択できる					○	○

図1 目指す児童像と、学年ごとに達成したい部分を図にしたもの

② 3つの授業の視点を設定し、学年や指導内容に応じて講じる手立ての、方向性を明確にした。

ア 各教科で思考力・判断力・表現力の向上を目指す授業改善

イ Chromebook を使った効果的な学習場面の設定

ウ 児童の自己有用感（自己肯定感）を育む学習活動の工夫

(2) 学年、ブロック、全校の教員で授業を見合い、共通の意識を持って、授業改善に取り組めるようにした。

① 学年ごとに研究授業を実施した。

② 研究授業を低・中・高学年ブロックごとで見合い、研究協議会を実施した。

③ 各ブロックから1学級の授業を全校の職員で見合い、指導者を招いて研究協議会を実施した。

2 研究成果（児童・生徒の変容等）

(1) 教員が、デジタル教材やデジタルツールを効

果的に授業に取り入れることができるようになってきた。

新しいツールを用いた指導方法と、これまで教育現場が蓄積してきた手法を、学習内容や児童の実態等、様々な条件に合わせて選択できるようになった。

(2) 教員が、デジタル教材やデジタルツールを用いた授業に積極的に取り組むようになってきた。

効果的な活用場面が分かってきたことで、一部の積極的な教員だけだったデジタル教材やデジタルツールを用いた授業の実施が、多くの教員に広まった。

(3) アンケート結果から、児童も Chromebook を使った学習に取り組むことで、互いの考えを認め合うことができた（図2の②③）、考えを深めることができた（図2の⑧）と実感していることが分かった。

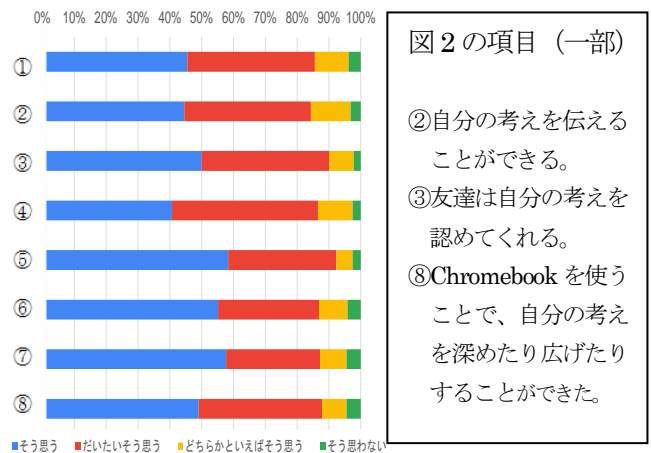


図2の項目（一部）

- ②自分の考えを伝えることができる。
- ③友達は自分の考えを認めてくれる。
- ⑧Chromebook を使うことで、自分の考えを深めたり広げたりすることができた。

図2 児童アンケート集計結果

3 今後の課題

(1) 児童の Chromebook の操作スキルは個人差が大きく、スキルの差があることを考慮した授業の組み立てが必要になる。研究の取り組みの中で、学年ごとの操作スキルの目安を設定し、段階的に指導している。

(2) ICT 機器の使用に関して、モラル面での課題が見られた。情報リテラシーを高め、有効に活用していきたい。

(3) ICT 機器を使うことが目的化していないか、学びは深まっているのか、の検証は常に行っていく必要がある。

「道徳的諸価値について、自ら考えたい！伝えたい！深めたい！と思える児童の育成」

～つながりを意図した道徳教育の実践を通して～

(1) 課題設定の理由

本校は、「自分の考えを伝えることが苦手な児童が多い」という実態から、道徳科において児童が思いを伝える活動を大切にしていきたいと考えた。そのためには、児童が自ら考えたい、伝えたいという主体的な思いをもつことが重要である。

また、児童の主体的な思いを育む上で、は、「多くの教育活動」「他の教科・領域」「道徳科」の補充・深化・統合が不十分であることが現状であり、児童が自己を見つめる時間に自分の経験を振り返ることが難しいという課題がある。

そこで、教師も児童もつながりの中で道徳的諸価値への理解を深めていくことにより児童が自分事として道徳的価値を捉えることや、自己を見つめることの充実も図られると考え、本主題を設定した。

(2) 研究の仮説

- ① 児童の発達段階や実態を踏まえ「意図を明確にした授業」を行えば、児童が自ら考えたい、伝えたい、深めたいという意欲をもって学習に取り組むことができるであろう。
- ② 「並木小特別葉」に基づく授業を行えば、道徳教育における道徳科と各教科・領域等とのつながりを意識でき、より自分事として道徳的諸価値について考えることができるであろう。

(3) 主な取り組み

- ① 校内授業研究会・協議会
「生命尊重」に重点を置き、価値理解の発問を追求していく研究を進めていった。



【11/29】低学年 彩の国の道徳
『たいせつな たからもの』



【12/4】中学年
『ひきがえるとロバ』

②研修会（講義・指導案検討）

聖徳大学名誉教授 吉本恒幸先生
所沢市立中央小学校 岡崎秋世校長先生を招聘しての御講義



低学年ブロック

『ハムスターの赤ちゃん』



中学年ブロック

『おばちゃん、がんばれ！』

④ 自分の考えや思いを伝えるツールの活用

- ・ ペープサート・心メーター・ホワイトボード

⑤ 掲示物の作成

- ・ 全クラス『道徳のあゆみ（板書）』の設置
- ・ 職員室前の道徳コーナーの設置

⑥ 並木小特別葉・いのちのプログラム

- ・ 「並木小特別葉」の作成
別葉から本校の重点内容項目「生命の尊さ」に特化した学年ごとの特別な別葉
- ・ 各学年「特別葉」に基づく「命のプログラム」の作成・実施
- ・ 全クラスで「命のオリエンテーション・命のアンケート」実施
- ・ 全校で「命のノート」を使用

2 研究成果（児童の変容等）

- ・ 道徳科のあり方や他教科への結び付きを意識しながら授業を実施できた。
- ・ 「価値理解の発問」を置くことで、価値について深く考える児童がいた。
- ・ 普段自分の考えを伝えにくい児童も、タブレットやペープサート等を用いることで伝えることができていた。
- ・ 教員の授業づくりの基本や組み立て方をアップデートすることができた。
- ・ 命の授業に対する教員の理解が進んできた。

3 今後の課題

- ・ 「命のノート」の活用から、他教科で「生命」について考える時間を持ち、児童なりに授業と結び付けて考えていたが、道徳教育として道徳科と他教科への繋がりをもたせることは難しかった。
- ・ 来年度からは教員が教材を読み込み指導の意図を明確化する時間や、研究推進委員会などで話し合う時間を確保していきたい。

『子供一人一人のよさと可能性を拓く指導法の研究』

～「やってみたい、わかった、できた」と感じられるスモールステップの工夫と ICT の活用～

1 研究概要

本研究は、体育科授業における教師の指導の選択肢を増やししながら、児童が「やってみたい、わかった、できた」と感じられる「指導法の研究」を行うことで「指導力」を向上させ、子供一人一人のよさと可能性を拓くことをねらった研究である。「跳び箱運動」「ボール運動(ベースボール型)」にしぼり、研究を行った。

○主題にせまる指導法の研究【3つの手立て】

(1) スモールステップの工夫

「跳び箱運動」「ボール運動」それぞれのスモールステップの方法をしぼり、研究を進めた。それぞれの工夫や概要は以下の通りである。

① 「跳び箱運動」→【場】のスモールステップ
「跳び箱運動」では、めあてに向けて技能面やメンタル面、ICT の活用など多様な場を用意し、児童がスモールステップを踏んで技能や思考力が育まれるような場を設定した。

② 「ボール運動」→【ルール】のスモールステップ
「ボール運動」では、系統的に指導ができるようにゲームのルールのスモールステップに焦点を当てて研究を行った。

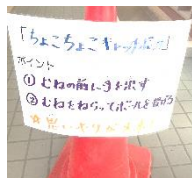
(2) サーキット運動の工夫

スモールステップの指導法を模索する中で基礎感覚づくりの重要性に気付いた。そこで、これまで和田小が伝統的に取り組んできたサーキットトレーニング(感覚づくり運動)に焦点を当て、指導法の研究の1つの柱とした。サーキットの工夫や概要は以下の通りである。

サーキットの種類

研究では、サーキット運動の設定を主に3つに分け、その学級の児童の実態や単元の内容によって使い分けた。

- ①全体が同じ動きを行う
「一斉サーキット」
- ②グループごとに異なる動きの場を時間で回る
「グループサーキット」
- ③自分のペースでそれぞれの場を回る
「個別サーキット」に分類した。



サーキットのポイント

(3) ICT の活用

体育授業における ICT の活用について、様々な活用の仕方を模索し、研究を進めた。

動画撮影・タイムシフトカメラの活用

跳び箱の学習では、児童同士が動画撮影を行い、技の完成度や課題の確認・共有を図った。また低学年では、タイムシフトカメラを活用して踏み切りや着手の位置など視点を絞ってすぐに振り返る活動を意図的に行った。



タイムシフトカメラ

2 研究成果

(1) アンケート調査による指導と評価の一体化

「やってみたい、わかった、できた」の3つの視点と3つの手立てを関連付けた児童アンケートを取ることで、教師の指導と児童の実態の相関性を確認した。

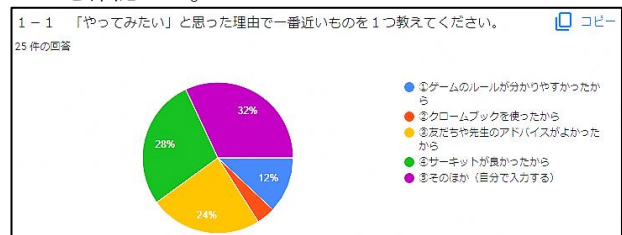


図1 授業後児童アンケート

(2) 【3つの柱】による指導力の向上

① サーキットの工夫

これまでの伝統を生かしつつ、また新たなサーキットの形を確立することができた。学校統一でどの単元でもサーキットを取り組むことで、児童に対して主運動につながる感覚づくりの時間や運動量を確保することができた。

② スモールステップの工夫

跳び箱では、各学年・各学級のスモールステップの場を記録に残し、共有することで選択肢が増えた。さらに和田小オリジナルの「跳び箱技系統表」「ベースボールルール系統表」を作成することで、系統立てて指導をすることが可能となった。

③ ICT の活用

ICT の活用例を共有し、積極的に ICT を活用することで技能を視覚的に確認したり、動画を観ながらアドバイスし合ったりするなど、思考する場面も多くなることができた。

3 今後の課題

ICT を積極的に使うことで、「この場面では ICT ではなく他の方法の方が有効なのではないか」など、ICT の良し悪しを検討する新たな視点も見えてきた。今後も ICT の有効な活用を研究していきたい。

めあてに向かって、自分の考えを表現できる児童の育成

～国語科において「対話」で学び、「書く活動」へ～

1 研究概要

(1) 国語科を中心とした授業づくり

- ① 「めあて」と「まとめ」「ふりかえり」
授業では、学びたくなるめあてを設定し、児童の主體的な学びにつなげた。めあてに対するまとめは全体で行い、学びを捉えなおすふりかえりは個人で書かせた。
- ② 「中富小の重点」の設定
 - ア 朝学習の活用
 - イ 学んだことがゴールにつながる単元計画
 - ウ 推敲の可視化
 - エ 深い学びにつながる対話的活動
 - オ 日常的な取り組み

(2) 「書くこと」の学習を充実させる工夫

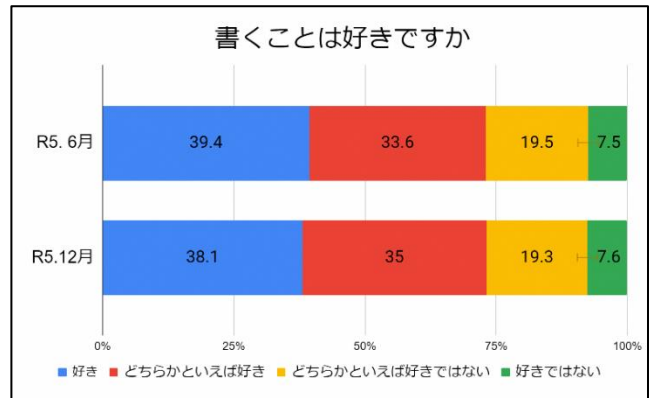
- ア 書くための材料をどのように集めるとよいか検討した。
- イ 達成感を感じる単元の目標を設定した。
- ウ 書く前や書いているときに、対話的活動を取り入れ、書きたい内容を明確にしたり、新しい視点での考えを取り入れたりした。

(3) 言葉の獲得と豊かな表現について

- ア 様々な詩の暗唱チャレンジ
- イ 語彙を増やしていくための掲示物の作成
- ウ 辞書の活用



- (3) 一時間の「ねらい」を明確にしたことで、ふりかえりの活動が充実し、自己の活動をよりよくとらえることができた。
- (4) 詩の暗唱、言葉集め、作文の書き方指導の取り組みにより、児童が豊かな語句にふれる機会が増えた。



- ・ アンケート結果から、「書くことが好き」と答えた児童が70%以上になった。
- ・ 詩の暗唱チャレンジによる児童の達成感を掲示することで、自己肯定感が向上した。
- ・ 国語科の基本的な授業展開や指導計画の立て方を職員で共通理解し、実践することができた。
- ・ 「推敲」の視点をもつことで、書いた内容を読み返す習慣が付き、文を自分で正すことができた。
- ・ ねらいを明確にしたことで、ふりかえり活動が充実し、自己の活動を十分捉えなおすことができた。
- ・ 辞書を活用する機会が増え、つかう言葉に「こだわり」をもつようになってきた。

2 研究成果（児童の変容等）

- (1) 国語科の基本的な授業展開や指導計画の立て方の共通理解ができ、より良い実線となった。
- (2) 「推敲」の視点を持ち、書いた内容を読み返す習慣がついた。

【低学年】 ・自分で読み返す。・まちがいを正す。
・語や文の続き方に気付く。

【中学年】 ・伝える相手や目的を確かめる。
・語順や文に気をつけて文章を整える。

【高学年】 ・構成を考える。・表現を工夫する。
・適切な語句を使用する。

3 今後の課題

- ・ 対話によって考えの深化を図ったが、気持ちの伝え合いで終わってしまうことがあった。
- ・ 「書くこと」の系統図をもとに、学校全体で系統的な指導を持続させていきたい。
- ・ 友達と対話をする中で、相手に何を助言すれば良いのか、文をどのように整えれば良いのか、取組に消極的な児童がいる。対話の仕方や推敲の仕方を継続して取り組むことが必要である。
- ・ 表現が豊かな文章を作るために、気持ちや様子を表す言葉を増やす取り組みを考えていく必要がある。

主体的な学び、友達と協働し、豊かな学校生活をつくる特別活動

～自ら考え、学び合い、笑顔あふれる児童の育成～

1 研究概要

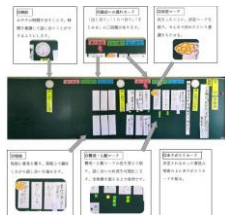
(1) 研究テーマについて

昨年度は、自ら考え、学び合う児童の育成として「主体的な学びにつながる授業の構築と実践～教師が変わる子どもも変わる～」を研究テーマとして取り組んできた。今年度は、昨年度までの取り組みを継続しつつ、自ら考え、学び合う児童の育成を特別活動の実践を通して行った。そこで研究テーマを上記のように設定した。特別活動は様々な集団での活動を基本としている。「人間関係形成」「社会参画」「自己実現」の3つの育成の視点を据えながら、児童が互いのよさや可能性を發揮する望ましい集団活動を展開し、学校教育目標である「かしこく、やさしく、たくましく」の実現に向け、自ら考え、学び合い、笑顔あふれる児童の育成とその指導法について学級活動(1)の学級会を中心に研究した。

(2) 目指す児童の育成にむけた指導の工夫

① 山口小学校学級会スタンダード作り

- 一連の学習過程を意識した授業実践 毎学期に授業研究会を実施。今年度、全クラス研究授業の実施。
- 一連の学習過程を確認できる山小学級会ハンドブックの作成。



② 学級活動に関する環境整備

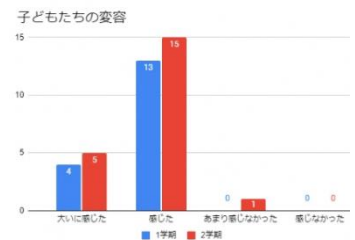
- 学級会グッズの作成と統一。
- 「学級会コーナー」設置。
- 話し合った議題を集めた掲示物の作成。
- 委員会コーナー等の設置。

③ 6年間を見通した計画的な指導

- 年間計画の見直しと作成。
- 共通のグッズで基本的な進め方をかえずに継続的に実践できる土壌作り。

2 研究成果

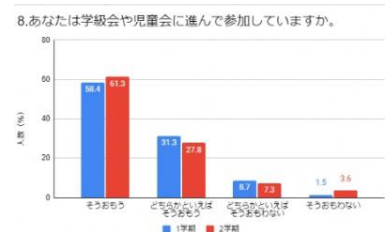
- 集団活動に対して前向きな児童が増え、「みんなにとって」の視点で物事を考えられる児童が育成できた。
- 「何のための話し合いなのか」「これを実現する意味は何なのか」という目的意識をクラス全員で話し合えるようになった。
- 自分とは違った意見を受け入れながら話し合えることができるようになった。
- 職員が児童の変容を感じることができ、学級会に取り組む必要感をもつことができた。



教職員アンケート

3 今後の課題

アンケート結果として、教員は児童の変容を感じているが、児童は自分たちの成長をあまり実感できていないことが分かった。これは児童がさらに上位の課題を捉えだしたと考えられる。今年度の取り組みを継続し、児童が「自分たちの力で話し合い、何かを成し遂げることができた」と思える経験を積み重ねていくこと、また、児童の姿を教員が見取り、価値づけていくことで、児童にも自分たちの変容を感じさせたい。



児童アンケート

能動的に読んで自分の思いを表現できる児童の育成 をめざした指導の工夫・改善

1 研究概要

本校の児童は、各種調査等から「読むこと」や「書くこと」などの力が弱く、自分の考えなどを文章等に表現することが苦手であることが分かっている。そのため、「能動的に読む力を高めることができれば、自分の思いを表現する児童が育つ」という仮説のもと学校がチームとなって取り組むよう以下のような組織づくり、研修の方向性、仮説による手立てを行った。

(1) 研究推進委員会による研究組織づくり

以下の3つの部を組織し活動を始めた

- ① 「授業研究部」・・・研修内容を授業の中でどのように活用していくかを考え、提案をする。
- ② 「環境づくり部」・・・掲示物の作成や教材教具の充実
- ③ 「調査部」・・・児童の変容を見るためのアンケート等を実施し、集計・分析をする。

(2) 研修における共通理解を図る

研修を進めるにあたり、教職員の共通理解を図るため指導者の先生を招聘した。そして、本校の主題に沿った「児童が能動的に読むため」にまた、「自分の思いを表現するため」にどのような研究を進めれば良いかについて講演をしていただいた。これにより、教職員が同じ方向を向いて研修を進めることができた。

(3) 仮説に対する取り組み

- ① 単元を組み立てる際に、具体的なゴールである「この学習を通して、何ができるようになればいいのか」という具体的な児童の姿をイメージする。
- ② 具体的なゴールから逆算して1時間ずつ学習活動や導入を決めながら、見直し、振り返り、対話、概念化をきめる。
- ③ 「読むことに必要な力」や「児童に付けるべき力」を細分化して考える。
- ④ 国語において身に付けさせる「学習内容（方略）を明確にする。
- ⑤ 学習の振り返りの充実

(4) 全学年での取り組む手立て

仮説の取り組みを受けて全学年で以下の取組を行った。

- ① 「単元構想シート」を活用した教材研究
- ② 「振り返りポイント」を明示した「振り返りシート」の活用
- ③ 語彙力を高めるために「言葉の宝箱」の教室掲示
- ④ 国語アンケートの結果を通し、児童の実態把握

2 研究成果（児童の変容等）

(1) 研究組織づくりについて

各組織内での活動も活発に行われ、3つの部がそれぞれ有機的に機能しあい、研究の方向性を意識しながら各部が活動することができた。

(2) 研修における共通理解を図るについて

指導者の先生とは密に連絡をとり、教職員間も情報共有をしながら研修を進めた。研究授業も指導者の先生を交えて指導案検討を行った。

(3) 仮説に対する取組及び全学年の手立てについて

- ① 言語環境を整えることによって、児童が普段から発表等のときに意識して言葉を選び使うようになった。
- ② 意見や考えを交流しあう場では他の人の意見や考えを知ることができ、そこからヒントを得て、自分の意見や考えを広げ表現できる児童が増えてきた。
- ③ 「単元構想シート」を使うことによって、教職員が「何を指導するのか」「どんな力を児童に付けさせるか」が明確になった。



3 今後の課題

意見や考えを交流し合う場では、感想を言い合うだけの場になってしまうこともある。自分の思いを表現するために、友達の考えと同じところや違うところに視点をおかせ、自分の考えを広げたり、深めたりする指導をしていく必要がある。

自分の考えを進んで伝えられる児童の育成

～教師の問題意識から出発する3年間の校内研修を通して～

1 研究概要

(1) 主題設定の理由

① テーマについて

予測困難なこの時代の中で、答えが一つではない多くの問いに向き合い、主体的に考え、多様な立場の人々と話し合いながら協働的に問題を解決し、納得のいく答えを導こうとする資質や能力をどのように育てていくのか。教育の現場で子どもに向き合う我々にとって、喫緊の課題であると考えた。

所沢市の目指す「未来を切り開く確かな学力の育成」の実現に向けて、本校では自分の思いや願いを適切な方法で他者に伝えることが重要であると考え、「自分の考えを進んで伝えられる児童の育成」をテーマに設定した。

② 学び創造アクティブPLUSとの関わり

子どもたちは皆、「できるようにになりたい、よくなりしたい」と願っている能動的な学習者であるという前提に立ち、主体的・対話的で深い学びの充実を図り、子ども達の心に寄り添い、自己肯定感を高める指導・支援を行いながら、言語活動の充実や授業の質の向上、学習材の有効活用を図りたいと考え、研究に取り組んできた。

2 研究成果

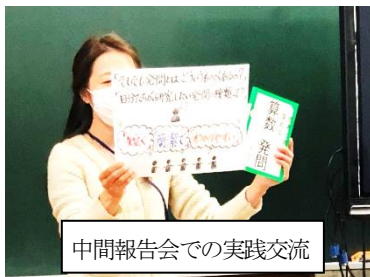
(1) 学校課題研究について

教師の問題意識からスタートする学校課題研究とし、教師自ら学んでいくことを重視した。

「日々の授業実践に立ち返る研究」「理論と実践の往還を意識した研究」「異年齢集団としてのチーム若狭のよさを生かし、メンター制を意識した研究」になるようにした。

日々の実践の工夫等を異年齢集団で交流できるよう、意図的・計画的に校内研修の時間を確保した。

グループごとの研究・研修内容を共有化できるように発表し合う機会を複数回(中間報告会・本発表会)、設定しICT機器の活用やワークシートなど共有できた。



中間報告会での実践交流

(2) 東京学芸大学教職大学院とのオンライン研修

東京学芸大学教職大学院准教授増田謙太郎先生

お招きし、研修を行った。増田准教授に指導をいただきながら、ゼミ生とオンラインでの交流と研修を行った。コロナ禍での研修の工夫の一つとして取り組めた。



増田先生の研修とゼミ生とのオンライン交流

(3) ベテラン教員から若手教員への継承

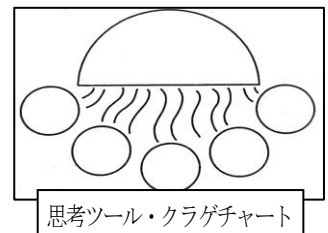
コロナ禍のため、指導案検討や研究授業、研究協議会を経験したことがない若手の教員もいた。メンター制を意識し、校内研修の中でグループ内でベテラン教員と若手教員がともに指導案検討、研究授業の準備、教材研究等を行う時間を設定した。研究の方法等や研修の進め方について学び、継承する機会を確保できた。

(4) ICT機器の活用

情報教育主任とICT支援員を中心に研修を実施した。クロームブックの活用やスクールタクト、ジャムボードについて学び、日々の実践の中で活用する教員が増え、主体的・対話的で深い学びの実現のための授業改善に役立てることができた。

(5) 思考ツールの活用

学習を効果的に進めていくための学習材の工夫として、思考ツールの効果的な活用についての研修も進められた。



思考ツール・クラゲチャート

3 今後の課題

言語活動の充実を図ってきたが、文のつなぎ方や接続詞の使い方などの知識・技能の習熟を図っていく工夫も更に必要である。

思考ツールを与えられるのではなく、児童が自分で考え、どのツールを使うか取捨選択する力をどのようにつけていくのか、さらに研究が必要である。

コロナ禍の教育への影響が改めて大きいことが分かった。これまでのベテランの先生方の実践事例や工夫、積み上げきたスキルを意図的・計画的に継承できるようにする必要がある。

「シントコロザワ」のミライをつくる。

～ワタシが主役の『SDGs』の視点を持った探究学習～

1 研究概要

(1) 主題設定の理由

- ① 「総合的な学習の時間」にスポットをあて、「総合」はすべての教員が教えるものであり、教員の指導力向上に繋がる。
- ② 生徒が探究サイクルを学ぶことで、進路決定や人生設計に役立つと考えた。
- ③ コミュニケーション力の向上

(2) 研究の概要と実践

- ① 教員が「総合的な学習の時間」の意識を共有した。「課題解決」「粘り強さ」をキーワードに、「ミライの向陽生」として目標を設定した。

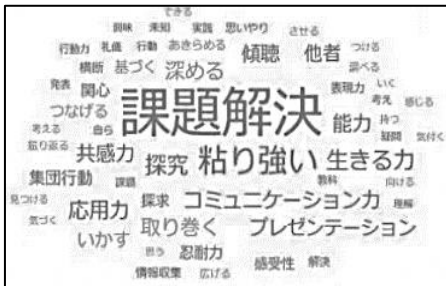


図1 総合で身に付けさせたい資質能力

- ② 「総合と教科で関連のある資質・能力」について教員同士で共有した。
- ③ 単元づくりと生徒の課題設定に「マインドマップ」活用法を研究した。
- ④ 埼玉大学 宇佐見教授のご講演・ご指導
1学期の「総合」を振り返り、学年職員で共有し、宇佐見教授による「総合の評価と総合の基本的な考え方・生徒のみとり方」のご講演・ご指導をいただいた。
- ⑤ 各学年で今後の「総合」の流れを再確認した。
- ⑥ 宇佐見教授による「総合」の授業見学生徒をみとる様子や問いを育てる様子を見て頂き、改善へのご指導を頂いた。また、校内研修では、座標軸の思考ツールを活用し、今後の「総合」に対する課題と手立てを共有した。
- ⑦ 各学年による「総合」の検討
- ⑧ 研究授業（12月1日実施）
1学年 多様な職業観【整理・分析】

2学年 日本の伝統文化探究【課題設定】

3学年「シントコロザワ」のミライをつくる【表現】

2 研究成果（生徒の変容等）

(1) 教員

- ・ 教員へのアンケートを実施した。

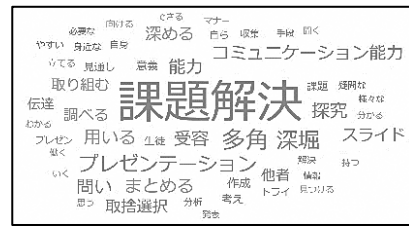


図3 総合で生徒が身についたと思う資質能力

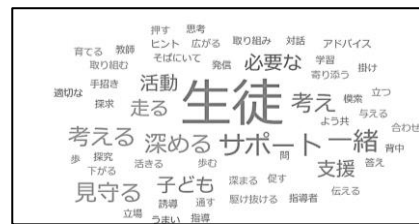


図4 伴走者とはどんなイメージか

- ・ 図4から、伴走者として生徒をサポートする意識がマインドマップに現れている。図1と比較し、図3では、「深堀」「多角」が加わり、教員が生徒の問いを育てる意識をもって教育活動していたことが現れている。

(2) 生徒

- ・ 生徒アンケートを行い、「総合で身についた力」の問いでは、「自分の考えと他者の考えの違いを互いに認め合い一致させる力」が65.7%で一番多かった。「問題に対し粘り強く自分で解決しようとする力」は15.7%と低い数値であった。
- ・ 自己評価、他者評価や問いを育てる活動がより主体性をもって課題解決に取り組んでいる様子も見られていた。

3 今後の課題

- ・ 生徒が主体的に取り組む工夫。
- ・ 探究サイクルを継続的にまわし、深めていく。
- ・ 指導と評価の一体化

能動的な学習者の視点に立った授業づくり

1 はじめに

3観点評価となり、3年が経過したが、今なお評価方法など課題となっている。本校でも、学習評価に対して課題意識を持っている教員は少なくない。特に、主体的に学習に取り組む態度に関しては、その捉え方も含めて、課題意識がある。

そこで、主体的に学習に取り組む態度に関する研修を軸に、本研究を進めることとした。

2 研究について

○ 教育理念「はじめに子どもありき」

本校には「はじめに子どもありき」という教育理念がある。これは、「子どもとは本来よくなりたいと願っている存在である」という考え方である。この考え方を根幹として、学習指導をはじめに、本校の教育活動は行われている。

はじめに子どもありきの考え方からすると、学習指導に関しては、以下の3点を意識する必要がある。

(1) 学習前：教材選び

教材選びに関しては、子どもが何を求めているかを見取るところから始まる。子どもの願いを教材選びの出発点とすることが大切である。自らが学びたいと思えるような教材、学習することに対して納得感を得られるような教材を選ぶ必要がある。

(2) 学習中：授業中の支援

授業の展開として、導入→展開→まとめ進むことが一般的とされている。その授業において、子どもがどうなりたいかと思うかを予め教師が予想するところから支援は始まる。子どもは授業ではできるようになりたいと願っていることから、教師の手立てによっては、主体的に学ぶことができる。そのためこれから行おうとしている授業は、どのような授業で、子どもがどのようになりたいか、そのためにはどのような手立てがあれば子どもは主体的に学習を進められるかを考える必要がある。

また、授業中に出来ていない子ども、授業についていけない子どもに対して、どこでつまづいているのかを考えることが求められる。つまづいている場面として、指導の中の発問の意味が分からないのか、ワークシートなどに記入する上で、表現の方法がわからないのか、そもそも内容自体理解できていないのか、などが考

えられる。これらは、教員の指導に原因があると考えられる。そうすることで、子どもの現状の捉え方も変われば、支援の内容も変わる。

(3) 授業後：形成的評価の必要性

子ども一人一人の授業内容の理解度を計る必要がある。これは実際に子どもに還元する評価（通知表などの評価）よりも、形成的評価（指導に生かす評価）を意味する。授業には、教師が定めた目標があり、子どもに身に付けさせたい資質・能力がある。教師は筋道を立てて授業を展開するが、一方で、子ども自身はその筋道通りに進むとは限らない。授業後、その内容に対して子ども一人一人が理解をしているかを計り、理解が不足している場合は、支援を行う必要がある。また、その授業における指導展開等に関しても、理解が不足している生徒が多ければ、見直す必要がある。

以上の考え方を基に、全教員が資料作成し、授業を実践した。その際、独りよがりな考えとならないように、教科部会を重ね、子どもに対する捉え方、教材に対する考え方、支援の方法等を検討した。

3 研修の成果と課題

授業実践を行った教員のアンケートから、授業実践に対して以下のような成果と課題が示された。

【成果】

- 英語科：英語が苦手な生徒であっても、得意な生徒であっても、各自が各自の力を伸ばすのに適した取り組みとなった。
- 国語科：子どもたちから出た疑問を課題とし、自分たちの力で解決していくという方法は、子どもたちにとって学習の必要性を感じやすく、「学習に取り組もう」という意欲につながっていたと感じた。

【課題】

- 国語科：1つの課題を解決するのに時間がかかり、すべての単元をこの方法で取り組んだら授業数が足りない。

全教員で「はじめに子どもありき」という教育理念の共通理解をはかり、各授業を実践できたことは、成果と言える。今後は、学習課題の設定の仕方や学習評価（方法や回数、場面など）などを課題とする。

生徒が自ら学び、互いに認めあう授業づくり

1 研究概要

(1) 東京大学名誉教授佐藤学先生による「学びの共同体」の研修及び柳瀬中「協同的な学び」のルールの確立

- ① 学びの環境整備
 - ア 4人グループで授業する。(原則)
 - イ 授業の始まりは落ち着いた雰囲気です。
- ② 「協同的な学び」の指導について
 - ア 授業のねらいをはっきりと示す。
 - イ 開始5分以内にグループ課題を提示。
 - ウ 生徒と生徒をつなぐ。
 - エ 学びが生まれていない時は、協同的な学習を終了させる。
- ③ クラス全体で「学び合う」場面について
 - ア 授業者はファシリテーター(学びの進行役)に徹する。
 - イ 授業者が答えを言ったり、ポイントをまとめたりすることはあえてしない。個の学びを成立させることが重要である。
 - ウ 正解を求めることよりも、その理由や学びの過程を大切にする。
 - エ 「共有課題」と「ジャンプ課題」の設定。
- ④ 教師の同僚性を大切にする
 - ア 授業をいつでも誰でも見ることができ、授業のアイデアやデザインを共有。
 - イ 生徒の力を信じ、あきらめない。
 - ウ 教員も協同的に学ぶ。

(2) 校内研修並びに公開授業

- ① 全職員を学習環境部、授業研究部、調査研究部の3部に分け研修をすすめた。
- ② グループ学習を円滑に進めるため、生徒同士が聞き合う関係を作りやすい言葉かけを構想し、全クラスにポスターを掲示。
- ③ 年3回の公開授業を実施した。

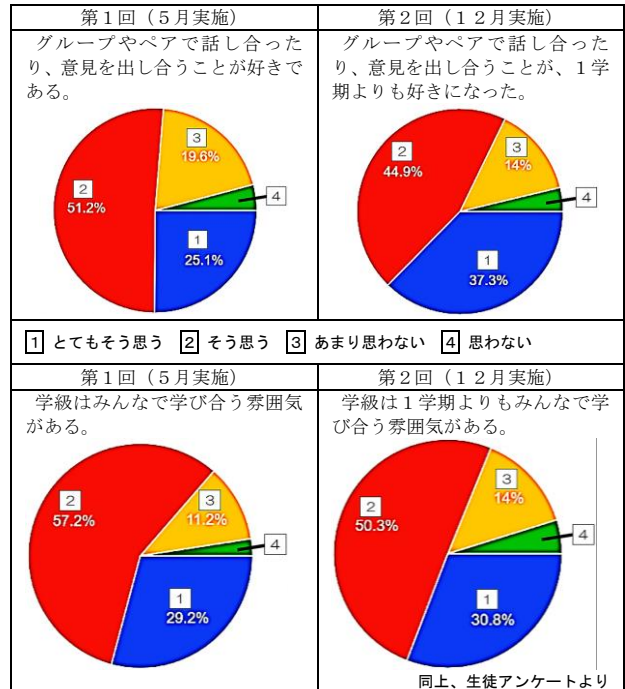
(3) 「学びの共同体」の研修に取り組んでいる学校への視察

- ① 神戸市立丸山中学校 (令和4年12月)
- ② 新座市立第三中学校 (令和5年6月)
- ③ 川口市立北中学校 (令和5年7月)

2 研究成果

(1) 生徒アンケートの結果と分析

日頃からグループやペアの学習形態を取り入れたことは、生徒が意見を出し合う上で効果的であったと考えられる。



(2) 教員アンケートの結果と分析

本研究において、多くの教員が意識・工夫したこととして、生徒間の聞き合いになる場面や活動を増やすことであった。授業実践を通して、生徒同士が互いに聞き合う・学び合う雰囲気が高まったと教員も実感がもてるようになったことが成果である。

教員アンケートでは以下の意見が寄せられた。

- 常時、グループ学習形態であることについて
「常にグループ学習では、教科の特性や学習内容にそぐわない場合がある」
「三者面談で黒板の板書やテレビ画面が見えにくいという話題があがった」
- 聞き合いの発展について
「周りの人の意見に委ねる生徒が増えたのではないかな」

3 今後の課題

学習内容に応じて、授業形態を柔軟に対応させたり、周りの人の考えを参考にして、自分の意見を持ち、深めることも大切な学習活動であることを生徒に伝える等、生徒がより学習に向かうための姿勢を高めるための工夫について、今後の検討課題としたい。

課題解決に前向きな生徒の育成

ICT を支援的に活用して

1 研究概要

定期テストや県学調、SUテストなどの結果から、思考を働かせて解く問題や、自分の考えを書く問題（思考判断表現）に苦手を感じる生徒が多かった。課題を自分事として捉え、受け身ではなく主体的に考えられるような力を育むために、上記のようなテーマとした

(1) 課題解決学習の定義

- ①自分で課題を見つける、又は立てる
- ②課題に対する情報の収集する
- ③情報を整理・分析する
- ④自分が調べたことをまとめ、表現する

(2) ICT を活用する理由

- ①ギガスクール構想の理念
→1人1台のクロームブック
- ②自己表現が苦手な子の支援
→ジャムボードやスクールタクトで可視化
- ③電子機器の扱いを学ぶきっかけ（教師）
→授業づくりの幅が広がる
- ④場面を分けて意図的に使用することで、学習意欲を喚起できる
→探求の4つのプロセスを意識

(3) ICT を効果的に使う場面の検討

=探求のプロセス=

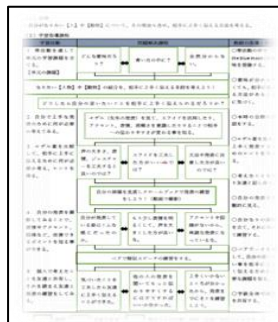
- ①課題の設定
 - ②情報の収集
 - ③整理・分析
 - ④まとめ・表現
- 各教科の**特性**に応じて ICT を効果的に使う場面の検討

(4) テーマにおける共通認識

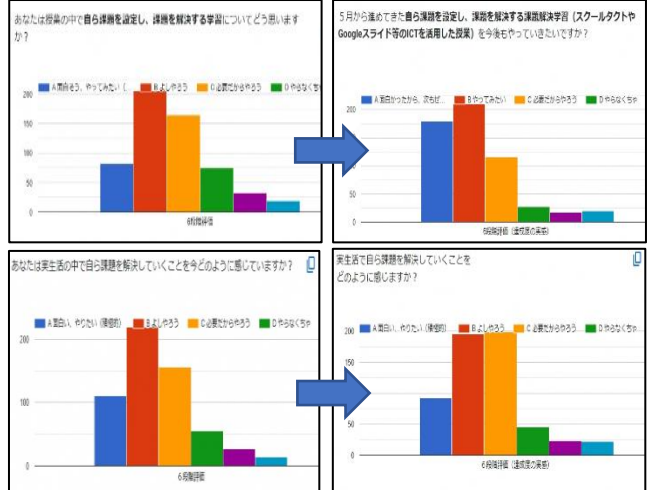
ICTは**手段**であって**目的**ではない。ICTを使った結果、課題解決に前向きな生徒が増えることが望ましい。

2 山森光陽先生の講義を経て

授業の中で思考がより深くなるような問いを持たせるために、思考の課程や生徒の反応を想定して指導案を作成することにより、教師がどの部分で介入すればいいかを計画することができた。



2 研究成果



* 5月（左）と12月（右）の意識調査の結果

- ・ ICTは**動機付け**としてとても有効であることが分かった。
- ・ 実生活で自ら課題を解決していくことをどう感じるのか。
よしやろう→減少 必要だからやろう→増加
- ・ 授業を通しての課題解決学習の「必要感」を持たせることが必要。

3 成果と課題

(1) 成果（教師）

- ・ ICTを用いた授業をする機会が増え、スクールタクトやスライドなどの扱いを覚えることができた。
- ・ 課題解決能力を高めるための「**発問**」や「**授業内容**」を工夫することができた。

(2) 成果（生徒）

- ・ 発問に対する自分の課題を知ることができた。
- ・ 自ら課題を解決していくことが大切と考える生徒が増えた。
- ・ ICTを用いて自己表現をする機会が増えた。

(3) 課題（学校）

- ・ ICTを使うことで、教員の授業準備に対する時間が増えた。
- ・ →スライドやスクールタクトで課題を作るのに手間がかかる。
- ・ **課題解決学習そのものに焦点をあてていく必要がある**ので、来年度以降は生徒たちが苦手と考える「**課題を立てる・見つける**」「**表現する**」という部分に着目していきたい。

生徒の表現力を高める指導の研究

1 研究概要

- 1年目：言語活動を中心とした、自己肯定感を高める授業（集団づくり）
- 2年目：言語活動の充実を通して、必要感・達成感を味わえる授業づくり
- 3年目：言語活動を通して、一人ひとりが表現を楽しめる授業づくり

① 「表現力とは何か」の共通理解

思考・判断・表現の評価

表現 = 思考・判断を可視化したもの

生徒が表現する場面を設定し、生徒の頭の中を覗き込んであげましょう。

年度当初の校内研修で職員全員が表現力の共通理解を持つ

② 各教科の実践事例の収集

自分の授業での捉え方

思考・判断

・より深い思考・判断への手立として学び合い（他者とのブラッシュアップ）が必要
例：話し合い、体験的活動（やってみる・試す）、他者からの評価（コメントなどの記述）

→

表現（アウトプットされたもの）

・自分の思考・判断したものを相手にわかりやすく適切に伝える（表現・アウトプット）ための場面や方法の工夫が必要
例：作品、レポート、記述（ws）、発表

「話し合い」…あくまでも自分の意見・製作物を決定するためのブラッシュアップとしての活動
①個（まず自分で考え）→②集団（他者と意見でより深く考え）→③個（他者の意見をもとに最終決定）の流れ

どのような工夫を行っているかを共有した（例・家庭科）

③ 絶賛授業公開中

先生方、教育実習生、いつでも大丈夫です。ぜひ教室に入って授業参観して下さい（他クラスの生徒は先生＆生徒でトラブルを防ぐため出入禁止）

学びの多い授業を作っています！

絶賛授業公開中！

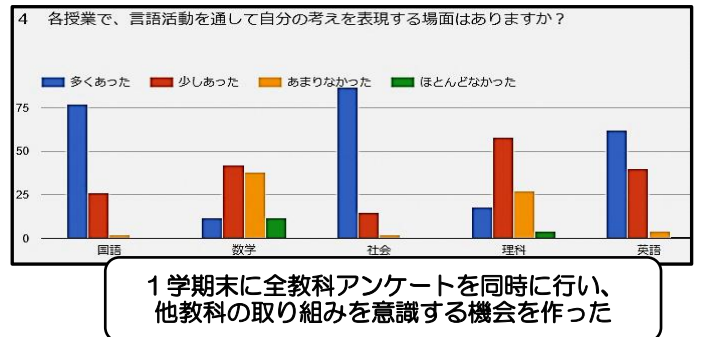
教育実習期間中（5月と9月）全教室の廊下に掲示した＝教師の学び合い

④ 研修報告書

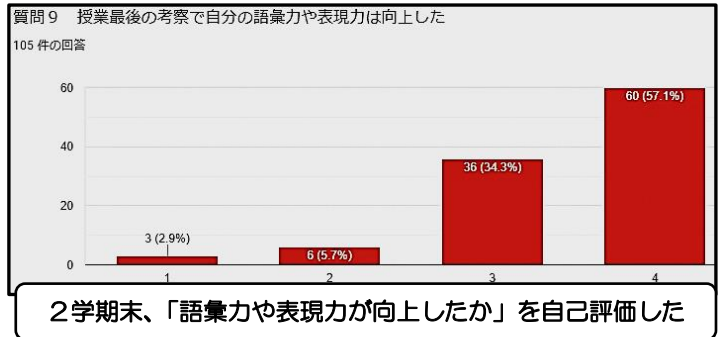
＜絶賛授業公開週間＞5月8日～26日	
学年・教科	振り返り（感想・参考になった点など）
3年・社会	第2次世界大戦の内容でしたが、非常に感情を揺さぶられた。例えば、ビデオ教材も効果的に活用し、人々の表情に注目させることで、当時の出来事を平面的に学ぶだけでなく、背景も含めて立体的に捉えられていた。感動した。
1年・音楽	歌詞を覚える段階の歌練習であったが、言葉の意味、背景をイメージさせることで表現力も自然とついてきたように思っていて驚いた。
1年・英語	読めない、書けない、話せなくても、ダンスを交えた歌で英語（言語？コミュニケーション？）を楽しんでいた。また、発音、アクセントを大切にすると「話す」自信をつけさせる秘訣かなと思いました。

授業公開を形だけで終わらせないため、得た学びを記録した

⑤ 生徒への授業アンケート



2 研究成果（生徒の変容等）



2学期末アンケート記述回答から抜粋（例・社会科）

「定期テストや入試に向けてだけを考えて行なうなら知識を覚えるだけでいい教科であるところを授業の中で考えたり、話し合ったりと家や個人ではできない集団のクラスであるからこそできることを最大限生かした授業だったなと思っていて、考察も含め学んだ知識の量以上に自分で考える力や伝える力などが身についたと思います。また個人的には授業自体も楽しく、三年生の最初に目標として仰っていましたが、体育と同じくらい楽しい社会の授業になりました。」（3年生男子）

3 今後の課題

他教科や学校全体に実践事例を広めること、それを若手からベテランまで含めた学校の取組にすること等、校内研修を自身の授業力向上に加えて職員同士の学び合いにつなげていくことが必要である。

特別支援教育と学力向上

～特別支援教育的視点による発達障害のある生徒の学習支援体制の向上～

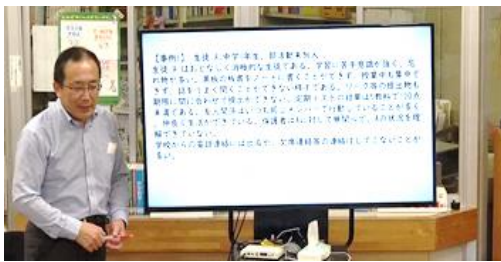
1 研究概要

(1) 研究テーマ設定の理由

すべての生徒が「わかった」と感じ、さらに学ぼうとする意欲を育むことが自己実現に向けてとても大切であると考え。そこで、配慮が必要な生徒を困らせない授業をつくることで、すべての生徒にとってわかりやすい授業になると仮定した。一人ひとりの特性を理解し、それぞれに適した授業を展開することが必要不可欠であると考え、研究テーマを設定した。

(2) 研究の方向性

- ① 誰にもわかる授業スキルを身につけるために発達障害への理解を深め、配慮が必要な生徒への対処法を学ぶ。ユニバーサルデザインの視点を柔軟に取り入れ、誰もが居場所のある山口中学校の授業スタイルを確立する。
- ② 指導者として共立女子大学家政学部児童科講師 坂本條樹先生に3回ご指導いただく。



研修会での坂本先生によるご指導の様子

- ③ 学校指導訪問において、全職員が指導案の中に以下の内容を記述する。
 - ・「生徒観」の中に、学年や学級の生徒の特性について記述する。
 - ・「指導観」の中に特性のある生徒への個別指導について記述する。
 - ・「学校研究にかかわる取組」の項目をつくり、ここに各教員が校内研究の趣旨に沿った取組内容を記述する。
 - ・生徒が授業の見通しがもてるように、1時間の授業の流れを黒板前面に提示する。

(3) 指導案の具体例（数学科の指導案）

① 生徒観

本クラスの生徒は、学習に対する態度が真面目で、授業には集中して取り組み、問題を解く等もしっかりと出来る。しかし、基本的な計算が出来ない生徒が多い。中間、期末テストでの基本

的な計算問題が出来ない生徒14名である。夏休み明け2学期に学びノート6年生版で分数等を含む基本的な計算練習を行っている。

② 指導観

本単元は、これから先の関数の学習の基礎となる。特に、座標の意味を確実に理解し、比例や反比例の関係をグラフに表すことを通して、その特徴を把握することは、今後の学習でもよく出てくる内容でもあるので、その手法をきちんと理解させておく。

基礎的。基本的な計算問題が苦手な生徒は、「I.k.」「S.Y.」「S.Y.」「S.S.」「S.R.」「S.S.」「T.R.」「T.M.」「F.K.」「H.T.」「M.M.」「Y.K.」「Y.K.」「Y.R.」の14名である。この14名は机間指導の際だけでなく、授業全体を通して指導していく。

③ 学校研究にかかわる取組

本校では学習面や行動面に困難さを抱えるなど、特別な配慮や支援を必要とする生徒が多く在籍している。発達に特性のある生徒に対する適切な指導及び支援を進めることによってクラス全体への指導につなげ、子どもたちの誰もが授業の中で自己存在感のある授業を身をもって体現し、学びの質の向上とする。

2 研究成果

- (1) 配慮が必要な生徒への取り組みを実践することによって、他の生徒への指導をより丁寧に行えるようになった。
- (2) 研修会で坂本先生のご指導のおかげで、とくに配慮が必要な生徒への指導を以前より丁寧に行えるようになった。

3 課題

- (1) 研修を通して、教員の指導力の向上があり、生徒同士の人間関係の向上もあった。今年だけのことに終わらせず、今後も継続していく。
- (2) カーテンを使用し、教室前面をすっきりするなど、環境面のユニバーサルデザインの意識は向上した。今後は学び方、教え方のユニバーサルデザインの研究をすすめていく必要がある。



カーテンを開けている状態



カーテンを閉めている状態